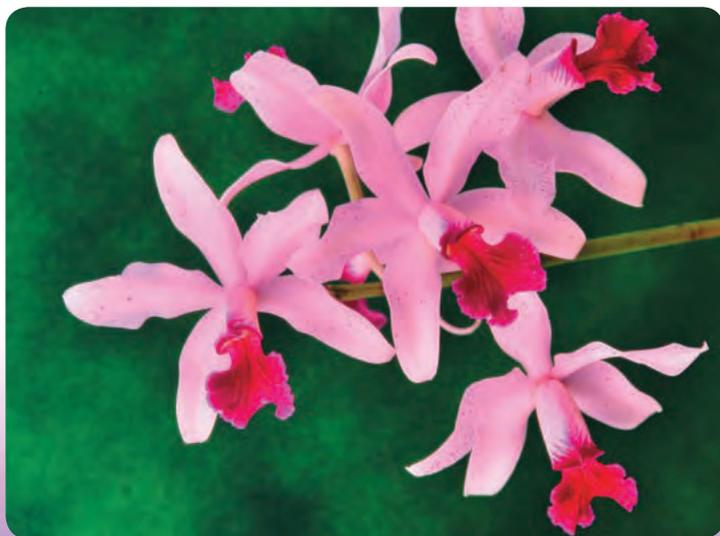


# 朝のこない夜はない

山首 鈴木正修



# 最終的に

## 人を動かすのは真心です

神奈川県座間市で自殺願望を持つ若い女性を誘い込んで9人（内一人は男性）を殺害するという事件がありました。8人の女性のうち3人が高校生だったそうです。犯人が言っています。話をする全員が本心では『自殺をしたくない』ということを感じた、と。

実際、世の中に本当に『自殺をしたい』と思っている人はめったにいません。特に若い女性で本当に『死にたい』と思っている人はまずいません。99%以上の人が『死にたい』と言って過言ではありません。「死にたい」と口にするのは寂しいとか、悲しいとか、『つらい』とか、『そうい



う感情かんじょうのシグナルです。それに周りまわが気づきづかなければいけません。よく、中学生ちゅうがくせい・高校生こうこうせいが自殺じざつをした後あとで「周りまわがなぜ気づきづかなかったんだ」と言いいますが、その通りとおで、周まわりが気づきづいて共感きょうかんしてあげないといけないのです。また、本ほん当とうに信しん頼らいできる人ひとに相そう談だんができると、状じょう況きょうは変かわっていくものです。「あの人ひとに相そう談だんしたお陰かげで人じん生せいがガラかッと変かわった」という話はなしはよく聞きくことすです。

## フランクルの愛情あいじょう

第だい二じ次せ世界かい大たい戦せん時じ、ナチス・ドイツのアウシュヴィッツ強きやう制せい収しゆ容よう所じよでは、多おほくのユダヤ人じんが強きやう制せい勞ろう働どうをさせられ、虐じやく殺ころされました。その強きやう制せい収しゆ容よう所じよから生せい還かんしたヴィクトール・フランクルという世せ界かい的てきに有ゆう名めいな精せい神しん医い学がく者しやがいます。フランクルの心しん理り療りょう法ほうはロログセセララピピー（意い味み療りょう法ほう）とし



て知られていきます。

『それぞれの人間の人生には独自の意味が存在している。その意味を見出すことができた人間はどんな苦しみにも耐えることができる』

この心理療法は強制収容所の中で深まり、より明確な方法へと高められていきました。

フランクのもとには、強制収容所の生活の中で生きる希望を失った囚人達が相談に来ていました。そして、その多くが「もう人生には何も期待できません。すっかり絶望してしまいました。ナチスの手によって、そのうち死に追いやられるぐらいであれば、自ら自分の人生を絶ったほうが、まだ人間として尊厳が保たれるというものではないでしょうか。フランク先生、私達はもう死んでしまったほうがいいのではないのでしょうか」というのです。

ある日のこと、同様の苦しみを抱えて相談に来た二人の



男女の囚人がありました。

二人は声をそろえて言いました。「自分の人生には意味がない、人生にはもう何も期待できない」

フランクは言います。「二人の言うことはある意味では正しかったのです。けれども、二人のほうには期待するものが何もなくても、二人を待っているものがあることがわかりました。男性を待っていたのは、未完のままになっている学問上の著作でした。女性を待っていたのは子どもでした。女性の子どもは遠く離れた外国で、ひたすら母親を待ちこがれていたのです。ここで大切だったのは考え方のコペルニクスの転換だったのです。

人生にまだ何を期待できるのか」と問うのではなく、人生は私に何を期待しているのかを問うのです」

わかりやすく言いますとフランクの心理療法は「どんなときにも人生には意味がある。なすべきこと、満たすべ



き意味が与えられている。あなたを必要とする何かがあり、あなたを必要とする誰かがいる。その何かや誰かのために、あなたにしかできないことがある。その何かや誰かは、あなたに発見され実現されるのを待っている。だから、たとえ今、あなたがどんなに苦しくて、人生に絶望していたとしても、人生があなたに絶望するということは決してないのだ」ということです。フランクに相談に来た囚人達はフランクに励まされ、多くが強制収容所を生き延びたのです。

次のような話もあります。フランクが自分のクリニックスにいる時、夜中の3時に女性から突然、「たった今、自殺することに決めました」という電話がありました。その女性に対してフランクは、時間をかけて説得を試み、自殺のプラス面とマイナス面をロゴセラピーの手法を駆使して話をし、自殺を思いとどまるように説得しました。する



とその女性は「わかりました。明日、先生の所へうかがっていいですか」と言ったそうです。「ぜひ、来てください」と言うと、次の日の朝にその女性が現れました。そして、いきなり「先生、もし先生が夜中におっしゃった議論の一つでも私に何らかの効果を与えたと思われるなら、それは誤解というものです」と言うのです。つまり、ロゴセラピーの効果は全くなかったのですよ」というわけです。フランクは驚き、話の続きを聞きました。

「もし私が感銘を受けたとすれば、それはただ一つ、寝ているところをたたき起こした私に、腹を立てて怒鳴りつけるどころか、しっかりと3時間も辛抱強く私の話を聞いて説得してくれた人がいたということです。そんなことがあるのなら生き続けることに、自分の人生に、もう一度チャンスを与えてもいいんじゃないかと思ったのです」

要するに、自殺を思いとどまらせたのはロゴセラピーの



技術ではなく、フランクルの愛情だったのです。どうにかしてこの人に自殺を思いとどまらせてあげたい。救ってあげたい」といふ真心だったのです。

フランクルは「私はロゴセラピーを提唱しているが、最終的に人を動かすのは真実の愛、真心しかない。医者の間性が患者の間性を呼び覚ますのだ」と言っています。人間は、死にたい。なんて本当は思っていないのです。誰でも、幸せな人生を歩みたい。と思っっているのです。その人間の本心を周りの人間の愛情が引き出すのです。それによって自殺を思いとどまらせることができるのです。

## 因果の二法を説いた杉山先生

二代目会長の村上先生も、自殺しようと思ったことがあった。と、法話集の中でご自身が告白をされています。杉



山先生と出会われた時の話です。

「私はその当時、愛知県立医学専門学校（現・名古屋大学医学部）に奉職しておりましたが、眼科の研究の傍ら、知多郡岡田に居住しておりました。しかし私も重なる不幸のために財産も皆無となり、妻には去られ、いかに努力せんにも方法さえ思いつかぬので、いっそ死んだ方が良いかと、そんなことを考えておりました時でした。ちょうど、前会長が訪ねて来られましたので、早速会いました。なんとなく心すぐれず無愛想であったと思います。四方山話をしている間に、私が次から次と災難の襲い来たって困りに困り、悲観のあまり自殺をしようと考えていることを話しました。前会長はその時、仏道の中の因果の二法を話してくださいました。——中略——この因果の二法を悟らずして、現在の苦しみを逃れんために自殺を遂げられても決して苦しみは無くならない。未来はより一層の苦しみを受けねば



ならぬ。およそ変死を遂げるものは必ず地獄を免れずとある』と、懇々と諭されました。

この杉山先生の話聞いて恐ろしくなり死ぬにも死なれず、初めて夢から覚めたような心持ちがいたしました。そうして今さらに、己れの迷妄を恥じ入りました。そして私如き罪業の深い者の艱難辛苦は当然であると悟り、今後はこの方とともに仏道修行をなし、我身の罪障を消滅するとともに、私と同様に世をはかなんでいる人々を導いていこうと決心いたしました。」

杉山先生のご教化は村上先生の機根を見てのきつい励ましであったと思いますが、深い慈悲心に裏打ちされたものです。



## 『最後の一葉』に見る励まし

エニアグラムという性格診断の手法を初めて日本に紹介された鈴木秀子さんというシスターがおられます。この方が古今東西のすばらしい文字を読み味わうことによって、人は心が癒されるといいう「文学療法」というものをされています。

ある雑誌でこの「文学療法」を連載しています。その中でオー・ヘンリーの有名な短編小説『最後の一葉』が紹介されています。小説の舞台はニューヨークのワシントン・スクエアにあるグリニッチ・ヴィレッジという芸術家の村です。画家や彫刻家を志す人がたくさん集まって、将来を夢見て頑張っていました。ある年の冬、その村に肺炎が蔓延し、ジョンジーという画家志望の若い女性が病魔に冒されました。鉄製の粗末なベッドに横たわって身動きもせ



ず、ただ小さな窓から外を見るだけの毎日でした。どんな絶望ぜつぼうしていき、生きる気力きりよくすら失うしなっていました。村むらを訪おとずれたお医者いしやさんがジョンジーを診みました。そして、仲間なかまのスウデイに「ジョンジーが助たすかる見込みみこは10に1つだね。その見込みみこも、あの娘むすめが、生いきたい」と思おもわなければどうにもならないよ。今いまのように葬儀屋そうぎやを呼よぶことばかり考かんがえているようでは、どんな処方しよほうも役やくには立たたないな。あんたのお友達ともたちは、治なおらないもの」と自分じぶんで決きめ込こんでいるから」と言いいました。

それを聞きいたスウデイはどうにかしてジョンジーを励はげまそうとして、ジョンジーの好すきな曲きよくを口笛くちふえで吹ふきながら、絵えを持って部屋へやに入はいっていききました。ところがジョンジーはもう全然ぜんぜん反応はんのうをしません。窓まどの外そとの中庭なかにわに蔦つたが生はえていて、その蔦つたの葉はっぱの数を数かずえてジョンジーは言いうのです。「12、11、10：最後さいごの一葉ひとはが落おちたら私わたしも行いかなきゃなら



ないんだわ」

「そんなこと言わないで、スープでも飲んで、精をつけてスウデイが言います。しかしジョンジーは言うのです。

「いらぬ。私は最後の一片が落ちるのを見たいの。もう待ちくたびれたわ。考えるのもくたびれたわ。私はすべての執着から解き放たれて、あの哀れな疲れ切った木の葉のように落ちて行きたいの」

このジョンジーの話をスウデイが、一階に住む「私は傑作を描くんだ」といつも言っている売れない酔っぱらいの老画家ベアマンに話しました。するとベアマンは「あんなくそおもしろくもない蔦のつるから葉っぱが落ちると自分も死ぬなんて、そんなバカなことを言うやつがどこの世界にいらんだ。そんなたわけた話、わしは聞いたこともない」と言いました。

その晩は雨と風が吹きすさぶ嵐の夜でした。大変な夜だ



ったのに次の日、ジョンジーが窓の外を見ると、奇跡のよ  
うに葉っぱが一枚だけ残っていました。その葉っぱを見て  
ジョンジーの態度が変わりました。ジョンジーはスウディ  
に言いました。

「私、悪い子だったわね。私がどんなに悪い子だったかを  
思い知らせるために、何かがああ最後の葉をあそこに残  
しておいてくれたんだわ。死にたいと思うなんて罰あたり  
な話ね。さあ、スープを少しちょうだい。それからミルク  
に葡萄酒を少し入れたのもね」  
「悪い子」とは、生きることをあきらめて、自分の命を大  
切にしない」ということを言っています。

ジョンジーは生きる気力を取り戻し、危機を脱しました。  
しかし、ベアマンが一階で肺炎のために亡くなりました。  
ベアマンは外でびしょ濡れになり、氷のように冷え切って  
苦しんでいるところを見つければ、部屋に担ぎ込まれたの



ですが亡なくなってしまったのです。ベアマンが外そとで見つかった時には、火ひのついたカンテラ（今いまでいう懐中電灯かいちゆうでんとう）や梯子はしご、数本すうほんの絵筆えふでがその周りまわりに散らばっていました。

この小説しょうせつは最後さいごにスウデイの言葉ことばで締め括しやくられています。「ちよっと窓まどの外そとを見てごらんなさいよ。あの壁かべの上うへの最後さいごの薫つたの葉はを。風かぜが吹ふいても、ちっとも動うごかないし、ひらひらゆれもしないのを、変へんだと思おもわなかった。ねえ、ジョージ、あれがベアマンさんの傑作けつさくだったのよ。最後さいごの葉はが落ちた夜よる、あの人ひとがあそこへ描かいたんだわ」

ベアマンは自分じぶんの命いのちをなげうって、若い画家志望がかしぼうのジョージを励はげまし、助けるために最後さいごの一葉ひとはを描かいたのです。どんな強つよい人ひとでも、人間にんげんは一人ひとりでは生いきていきません。いつも愛情深あいきよひんじふかく、真ま心こころで励はげましあって生いきていきたいものです。

